



オペラと皇帝と銭湯と

松本 侑壬子・ジャーナリスト

戦後の日本。自宅に風呂のある家は稀で、庶民はみんな銭湯に通った。そんな時代に大ヒットした歌。人気者エノケン（榎本健一）の喜劇映画の主題歌で、「お殿さまでもボくらでも、お湯に入るときゃ皆ハダカ〜」と。子ども心にも覚えている。“民主主義”とか“男女同権”という言葉が小学生の耳にも新鮮に響いたあのころ。喜劇映画にもそんな気分があふれていたのか。

ラテン語で「ローマの風呂」と題するこの奇想天外な歴史ファンタジーには、お殿さまならぬローマ皇帝が1人で風呂につかっている場面や、古代ローマの大浴場の様子も出てくる。男たちがそこでレスリングをしたり、食べ物の売り子が歩き回ったりと喧騒を極めている。

主人公のルシウス（阿部寛）は古代ローマの建築設計技師（風呂専門）。ライバルの出現で職を失った失意のある日、友人と共に公衆浴場で入浴中に、突然現代日本の銭湯にタイムスリップする。そこで日本の庶民らがいかに風呂を愛し楽しみ、そのための工夫を凝らしているかを目の当たりにして衝撃を受ける。壁に描かれた富士山の絵、湯を汚さぬように湯船の中では手ぬぐいを畳んで頭に乗せ、洗い場では笑顔で互いの背中を流しあう。湯上りには冷たいコーヒー牛乳からマッサージ器までかゆいところに手の届くサービス…。日本の高い銭湯文化に触れたルシウスは、以後なぜカタ

イムスリップを繰り返すたびに祖国ローマ帝国に日本での知見を生かした新しい風呂文化をもち込み、たちまち復権する。見よ、今ではローマの大浴場の壁には巨大なベスビオス火山のタイル画、湯上りのコーヒー牛乳、なぜか底に風邪薬の広告の入ったプラスチックの風呂桶まで。皇帝が1人楽しむ特製宮殿風呂も何やら豪華な内湯とも見える。まさに皇帝から庶民まで、ローマでも風呂は万人に愛される重要な施策の一角を占める。

どうやらルシウスは現代日本のことをローマの属国で「平らな顔族」の国と思いついていたフシがある。日本の銭湯のおじさんたちもルシウスを風呂好きな外人さん、風呂仲間として接する。ただ一人、ルシウスのタイムスリップに巻き込まれて一緒に古代ローマと日本を行き来する漫画家志望の山越真実（上戸彩）だけは、懸命に歴史書をひもときこの壮大な時空を超えた風呂文化交流事情を解明しようとするが。

抱腹絶倒の喜劇ながら、バックに流れるのは本格的なイタリア・オペラだ。「アイダ」や「トゥーランドット」はたまた「蝶々夫人」などの圧倒的な歌声が滔々と流れ、目を閉じればオペラ映画かと錯覚しそうだ。ラッセル・ワトソンの歌い上げるプッチーニの「誰も寝てはならぬ」が本作のテーマ曲なのだ。

原作は、マンガ大賞&手塚治虫文化賞短編賞を史上初のW受賞したヤマザキマリ同名の漫画。ヤマザキは若くしてイタリア留学、現在もイタリア人の夫と共に海外在住の40歳代というが、こうした斬新な視点はそうした作家ならではの？しかも、ルシウス役の阿部寛の彫刻のような見事な美丈夫ぶりはどうだ。イタリア最大のチネチッタ撮影所での壮大な史劇セットの中でも全く違和感がない。エノケンの時代は遠くなりにけり！だが、笑った後の風呂上りの爽快感には通じるものがあるだろうか。

『テルマエ・ロマエ』

日本映画（108分）／武内英樹監督

東宝系にて公開中

©2012『テルマエ・ロマエ』製作委員会

